

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第252集

長土呂遺跡群

上聖端遺跡Ⅳ

長野県佐久市長土呂上聖端遺跡Ⅳ発掘調査報告書

2017.12

佐久市教育委員会

例 言

1. 本書は、エフビーホールディングス株式会社が行う社屋建築に伴う長土呂遺跡群上聖端遺跡Ⅳの発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 エフビーホールディングス株式会社 代表取締役 柳澤 秀樹
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名および所在地 長土呂遺跡群 上聖端遺跡Ⅳ(NNKIV)
佐久市長土呂158-1、158-3
5. 調査期間及び面積 平成29年5月29日～6月7日(現場発掘作業)
平成29年6月8日～12月(報告書作成作業)
252㎡
6. 調査担当者 富沢一明
7. 本書の編集・執筆は富沢が行った。
8. 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

1. 遺構の略記号は、住居址(H)・土坑(D)・掘立(F)である。
2. 挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。
3. 遺構の標高は遺構ごとに統一し、水糸標高を「標高」とした。
4. 土層の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
5. 挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。



地山



焼土



掘方



黒色処理・磨り面・粘土



須恵器 調査状況(南より)



目 次

例言・凡例・目次

- 第Ⅰ章 発掘調査の経緯
1. 経過と立地
 2. 調査体制
 3. 調査日誌
 4. 遺構・遺物の概要
 5. 標準土層
 6. 調査の方法
- 第Ⅱ章 遺構と遺物
1. 竪穴住居址
 2. 掘立柱建物址
 3. 土坑とピット
 4. 調査の成果

遺物観察表

写真図版

抄 録



第1図 上聖端遺跡Ⅳ位置図(1:50000)

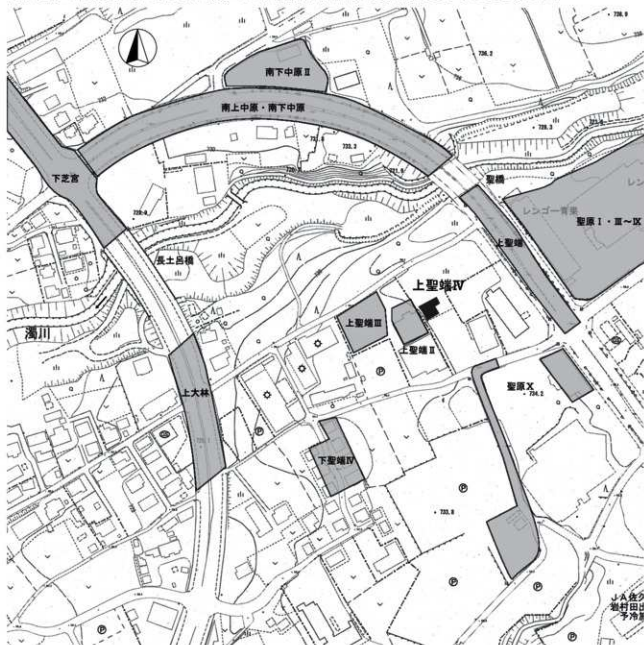
第I章 発掘調査の経緯

1. 経過と立地

上聖端遺跡Ⅳは、佐久市長土呂に所在し、長土呂遺跡群の中ほどに位置する。遺跡は、佐久平北部にみられる「田切り地形」の台地上に立地し、台地周辺の海拔は730m前後を測る。

本遺跡の周辺では、数多くの遺跡が調査されている。東西に延びる市道及び区画整理事業は、平成元年～7年度にかけて発掘調査が行われ、古墳時代から古代を中心とした集落跡が発見されている。出土遺物としては、堅穴住居から古代佐久郡の郷名の一つ「刑部」と記載された墨書土器が発見されている。

今回、遺跡群内で、エフビーホールディングス株式会社により社屋建築の計画がなされ市教育委員会に文化財保護法93条の届出がなされた。教育委員会では対象地の試掘調査を行い遺構が発見された為、遺跡の保護措置がとれない部分のみ、記録保存目的の発掘調査を行うこととなった。



第2図 周辺遺跡位置図(1:3000)

2. 調査体制

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	棚澤晴樹
事務局	社会教育部長	荻原幸一	
	文化振興課長	小林義夫	
	企画幹	小林登志郎	
	文化財調査係長	大塚広樹(4月～9月)	塩川宏幸(10月～)
	文化財調査係	小林眞寿	富沢一明 上原 学 久保浩一郎 岩下 琴

調査担当	富沢一明					
調査員	赤羽根篤	甘利隆雄	木内修一	堺 益子	柳澤孝子	大矢志徳
	中澤 登	横尾敏雄	依田好行	赤羽根充江	田中ひさ子	清水律子
	岩崎重子	林まゆみ	堀籠保子	橋詰勝子	橋詰信子	小林妙子
	浅沼勝男	小林敏雄	渡辺 学			

3. 調査日誌

平成29年4月3日	エフビーホールディングス株式会社より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。
4月5日	長野県教育委員会へ市教育委員会より29佐教文振第1004-2号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について(副申)
4月10日	長野県教育委員会より29教文第7-51号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)
5月17日	エフビーホールディングス株式会社と市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結。
5月29日～6月7日	記録保存目的による開発対象地の発掘調査を行い、引き続き報告書作成作業を行う。
6月7日	埋蔵文化財の発見届を佐久警察署に行う。
7月3日	長野県教育委員会より文化財認定がなされる。

4. 遺構・遺物の概要

遺 構	竪穴住居址	3軒(奈良・平安)	掘立柱建物址	2棟
遺 物	土師器・須恵器(坏・甕・壺)		石製品(磨り石)	鉄製品(鉄鍬)

5. 標準土層

今回の調査地点は南西側に僅かに傾斜する田切り台地上で、基本層序は3層に分かれ、Ⅲ層上面が遺構確認面である。確認面深さは地表より30～50cmほどであった。

第Ⅰ層	10YR5/1 褐灰色土 耕作土しまり弱い。
第Ⅱ層	10YR2/1 黒色土 軽石粒を多く含む。
第Ⅲ層	10YR6/8 明黄褐色土 P1層で上部に漸移層あり。



表土除去状況

6. 調査の方法

遺構調査

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査した。柱穴・炉・カマド等は適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。遺物は分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNoを付け3次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は遺構Noで一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。遺構外の遺物はグリッド毎に取り上げた。

遺構測量

平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遺り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

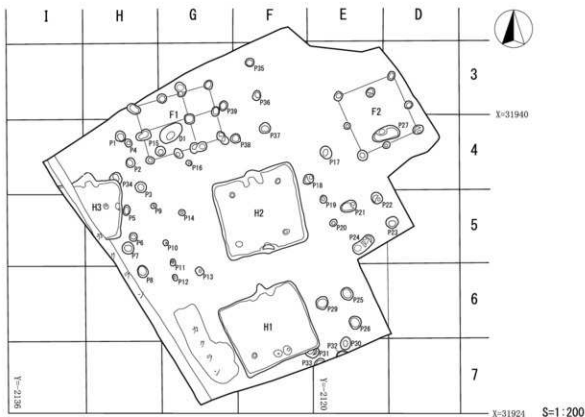
遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は手で竹ブラシを用い行い、室内で自然乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。

図面は遺構を1/40で修正、遺物を1/1で実測し、それぞれ仮図版を作成した。

写真・報告書

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーバースルで同一カットを各々記録した。遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。報告書文章と挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「イラストレーター」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。



第3図 調査区位置図

第Ⅱ章 遺構と遺物

1. 竪穴住居址

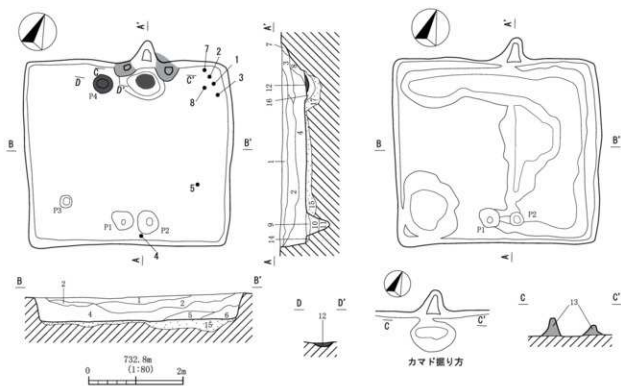
(1) H1号住居址

本址は調査区南側で検出された。形態は方形である。規模は、長軸4.17m・短軸3.56mを測る。床面積は15.14㎡を測る。壁深さは南壁中央で最大0.54mを測る。住居主軸方位はN-22°-Wを示す。床は全体に硬質で、全体に貼床が施されていた。ピットは4か所で検出された。各ピットの規模はP1が径0.47m・深さ0.47m、P2が径0.48m・深さ0.50m、P3が径0.26m・深さ0.16m、P4が径0.41m・深さ0.09mを測る。P1とP2は検出位置より入口施設と考えられる。

カマドは北壁中央部に構築され、袖部は良質な粘土により構築されていた。火床部はよく焼けている。住居掘り方は住居の北壁と東壁よりが一段深く掘り込まれていた。

本址からの出土遺物は住居北東コーナー付近からまとまって出土した。1と2は須恵器有台杯、3～6は須恵器杯、7は土師器杯で、内面黒色処理が施されている。8～10は土師器甕で、9と10はいわゆる「武蔵甕」と呼ばれるものである。11は鉄鏝である。

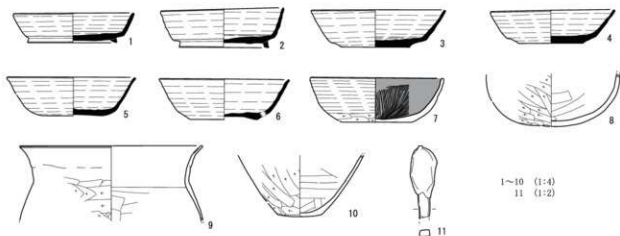
本址はこれら出土遺物から8世紀後半に位置づけられる。



1. 褐色土(10YR4/1) しまり・粘性あり。白色の粒子を多量に含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2) しまり・粘性あり。
3. 褐色土(10YR4/4) しまり弱い。粘性あり。焼土・粘土を多量に含む。
4. 暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性ややあり。ローム粒子を多量に含む。
5. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性ややあり。ローム粒子を少量含む。
6. 暗褐色土(10YR3/4) しまり・粘性ややあり。
7. 黄褐色土(10YR5/6) しまり・粘性あり。ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。
8. 明赤褐色土(2.5YR5/8) しまり・粘性弱い。焼土の塊。
9. 黒褐色土(10YR3/2) しまり・粘性ややあり。ロームブロックを含む。

10. 褐色土(10YR4/6) しまり・粘性弱い。ローム粒子を多量に含む。
11. にぶい黄褐色土(10YR6/4) しまり・粘性弱い。
12. 明赤褐色土(2.5YR5/8) しまり・粘性弱い。ぼそぼそした焼土。
13. にぶい黄褐色土(10YR6/4) しまり・粘性あり。非常にかたい粘土層(ソデ土)。
14. 黒褐色土(10YR2/3) しまり・粘性弱い。
15. にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり・粘性あり。φ2~3cmのロームブロックを多量に含む。
16. 灰黄褐色土(10YR4/2) しまり・粘性弱い。
17. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性あり。φ2~3cmのロームブロックを少量含む。

第4図 H1号住居址実測図



第5図 H1号住居址出土遺物実測図

(2) H2号住居址

本址は調査区中央で検出された。形態は方形である。規模は、東西の長軸4.18m・南北の短軸3.95mを測る。床面積は16.27㎡を測る。壁深さは北東コーナーで最大0.29mを測る。住居主軸方位はN-14°-Wを示す。床は全体に硬質で、特にカマド前面が顕著であった。貼床は全体に施されていた。ピットは4か所で検出された。P1からP4は主柱穴で、ピット間隔はP1-P2間が2.56m、P1-P4間2.90mを測る。それぞれのピットは柱痕が確認できた。各ピットの規模はP1が径0.29m・深さ0.53m、P2が径0.28m・深さ0.48m、P3が径0.34m・深さ0.56m、P4が径0.37m・深さ0.52mを測る。

カマドは北壁中央部に構築されており、袖部は良質な粘土により構築されていた。火床部はよく焼けていた。住居掘り方はほぼ均一であったが、カマド前面は一段深く掘り込まれていた。

本址からの出土遺物は覆土を中心に出土した。1は須恵器杯の体部破片である。外面に焼成前の記号的な印が確認できる。この印はヘラ記号とは異なり、スタンプ的な刻印の形状を示しており注目される。2は須恵器の長頸壺の口縁部から頸部で、3と同一個体の可能性がある。3は須恵器壺の胴部と考えられる。4は須恵器甕の口縁部である。5～7は土師器甕である。8は砥石であり、三面の砥面が確認できる。

本址からの出土遺物は少なく、不確定であるが8世紀代に位置づけられると考える。

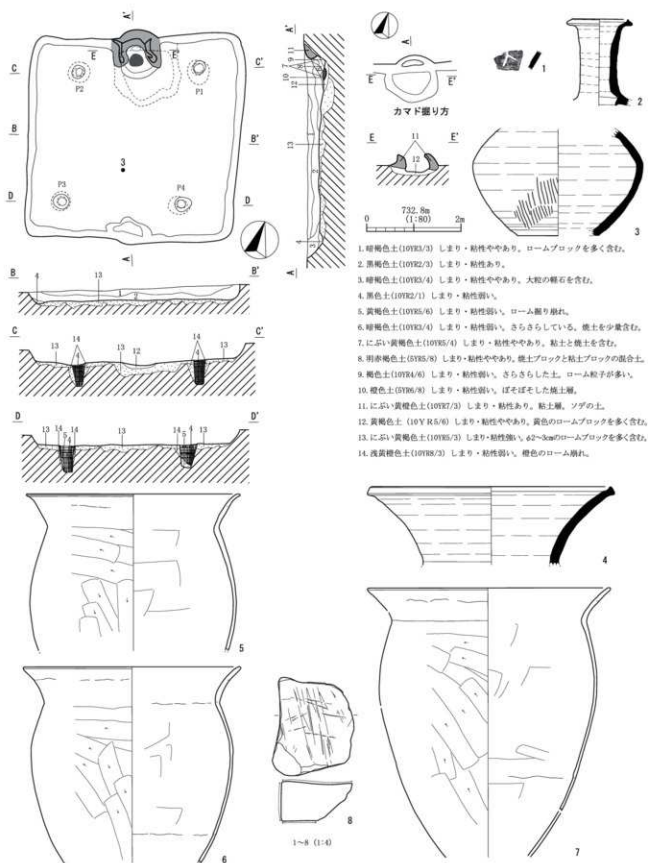
(3) H3号住居址

本址は調査区西寄りで検出された。西側が調査区域外となる。形態は方形と考えられる。規模は、推定で東西の長軸3.48m・南北の短軸2.80mを測る。床面積は検出部分で6.52㎡、推定で9.52㎡を測る。壁深さは南東コーナーで最大0.43mを測る。住居主軸方位はN-2°-Wを示す。床は全体に硬質であった。貼床は全体に施されていたが、中央部分は非常に薄かった。ピットは2か所で検出された。各ピットの規模はP1が径0.36m・深さ0.36m、P2が径0.32m・深さ0.30mを測る。

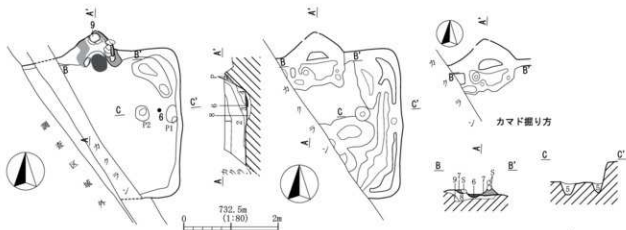
カマドは北壁中央部に構築されており、袖部は礫と粘土により構築されていた。火床部はよく焼けていた。煙道部には土師器甕が据え付けられており、煙出しとして使用されていた。住居掘り方は東壁より大きく深く掘り込まれており、掘り込みは畝状に凹凸が激しかった。

本址からの出土遺物は覆土に多く出土し、12点を図示した。1は須恵器蓋であり、赤褐色を呈する。2は須恵器有台坏である。底部は回転糸切りである。3～6は須恵器坏である。4の底部は回転ヘラ切り、6は底部ヘラケズリを施し、3と5は底部回転糸切りである。7は須恵器横瓶の胴部の破片と考えられる。ナデの成形がなされている。8は須恵器の大甕胴部破片である。自然軸の付着が確認できる。9～12は土師器甕である。いわゆる「武蔵甕」と呼ばれるものである。9は煙道部に使用されていた。

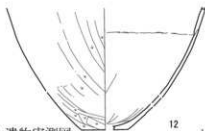
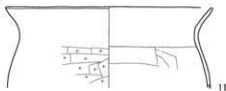
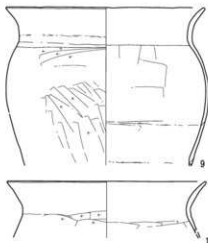
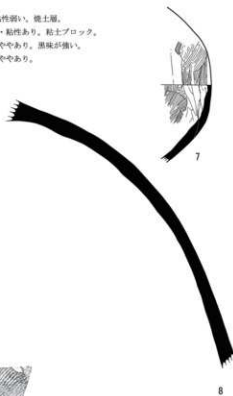
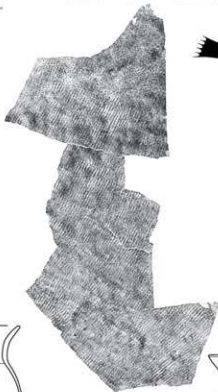
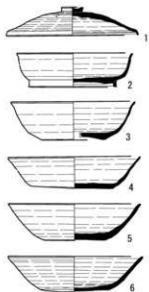
本址は出土遺物より8世紀後半に位置づけられると考える。



第6図 H2号住居址及び出土遺物実測図



1. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性あり。
2. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性あり。φ2~3cmの軽石を多く含む。
3. 暗褐色土(10YR3/4) しまり弱い、粘性あり。粘土ブロックを多く含む。
4. 明赤褐色土(2.5YR5/8) しまり・粘性弱い。焼土ブロック。
5. 黒褐色土(10YR2/2) しまり・粘性弱い。ぼそぼそした土。
6. 明赤褐色土(2.5YR5/8) しまり・粘性弱い。焼土層。
7. にぶい黄褐色土(10YR6/4) しまり・粘性あり。粘土ブロック。
8. 黒褐色土(10YR3/2) しまり・粘性ややあり。黒灰が強い。
9. 明褐色土(10YR3/4) しまり・粘性ややあり。



第7図 H3号住居址及び出土遺物実測図

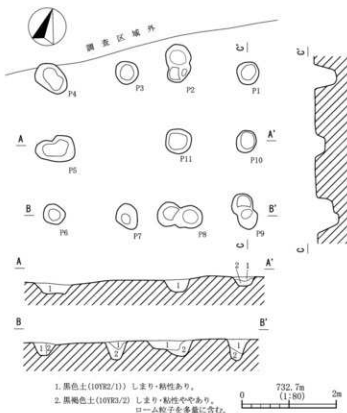
1~12 (1:4)

2. 掘立柱建物址

(1) F 1号掘立柱建物址

本址は調査区北側で検出された。形態は長方形の側柱式建物址である。規模は、桁行がP 1-P 4が4.20m、P 6-P 9が4.08m、梁行がP 1-P 9が3.01m、P 4-P 6が2.86mを測る。ピット間に囲まれた面積は12.24㎡を測る。長軸方位はN-74°-Eを示す。ピットは11か所で検出された。各ピットの規模はP 1が径0.50m・深さ0.47m、P 2が径0.80m・深さ0.35m、P 3が径0.50m・深さ0.25m、P 4が径0.75m・深さ0.42m、P 5が径0.83m・深さ0.23m、P 6が径0.46m・深さ0.27m、P 7が径0.55m・深さ0.37m、P 8が径0.96m・深さ0.32m、P 9が径0.77m・深さ0.48m、P10が径0.49m・深さ0.19m、P 11が径0.58m・深さ0.28mを測る。柱痕を示すような堆積は確認されなかった。また、P11があることから、P 1-P 9は下屋的な機能も考えられる。

本址からの出土遺物はP 1・P 6・P 9・P11・P12の各ピットより土師器甕片、土師器坏片等が出土したが、図示できるものはなかった。しかし、これらいずれの破片も古墳時代後期の所産を示すものであった。



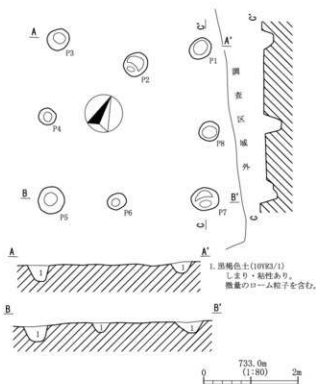
第8図 F 1号掘立柱建物址実測図

(2) F 2号掘立柱建物址

本址は調査区東側で検出された。形態は長方形の側柱式建物址である。規模は、桁行がP 3-P 5が3.35m、梁行がP 1-P 3が3.22mを測る。ピット間に囲まれた面積は9.84㎡を測る。主軸方位はN-23°-Wを示す。ピットは8か所で検出された。各ピットの規模はP 1が径0.48m・深さ0.25m、P 2が径0.53m・深さ0.20m、P 3が径0.48m・深さ0.38m、P 4が径0.36m・深さ0.16m、P 5が径0.58m・深さ0.34m、P 6が径0.41m・深さ0.21m、P 7が径0.60m・深さ0.26m、P 8が径0.44m・深さ0.37mを測る。柱痕を示すような堆積は確認されなかった。また、P 2とP 6が柱間よりずれる為、本址に伴わない可能性もある。

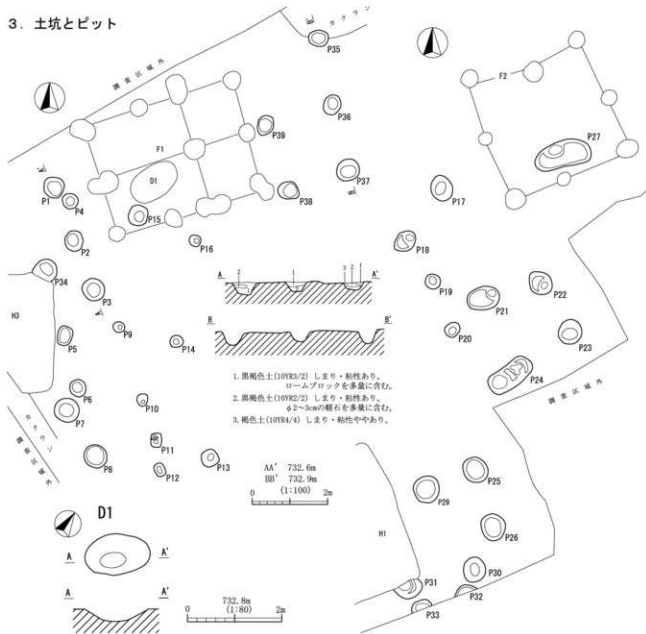
本址からの出土遺物はP 1・P 2・P 4・P 5・P 7・P 8の各ピットよりいわゆる「武蔵甕」と呼ばれる土師器甕片が出土したが、図示できるものはなかった。

本址の帰属時期は不明である。



第9図 F 2号掘立柱建物址実測図

3. 土坑とピット



第10図 D1号土坑及びピット実測図

4. 調査の成果

今回の発掘調査は252㎡という極限られた範囲での発掘調査となったが、竪穴住居跡が3軒検出された。これによりⅡ区とⅢ区を合わせると12軒の竪穴住居跡(P10参照)が調査された事となる。このうち所産時期が大きく異なるのはⅢ地区の北西隅に検出されたH4号住居跡が古墳時代後期であり、そのほかの11軒の住居跡はいずれも7世紀末から8世紀代の範疇として捉えられる。また、これらの住居跡群は規模の大小を持ちながら、各遺構は重複せずある程度の距離を置いて存在することから、同時併存の可能性も指摘できる。また、竪穴住居跡に添うように掘立柱建物跡も検出されている事から、奈良時代頃の集落の一端を調査したことになろう。近接する聖原遺跡ではこの8世紀代の集落が、上聖遺跡付近には広がっておらず、今回の調査地点から西方向に、田切り台地縁辺に添って集落が形成されていたことが推測できる調査成果となった。今後は聖原遺跡側で確認されている各エリアの集落が、各々では集落内容が同じなのか、違いがあるのか検証していく必要があろう。以上雑駁ではあるが調査のまとめとしたい。



第11図 上聖端遺跡Ⅱ～Ⅳ全体図



上聖端遺跡Ⅳ全景(南西より)

第1表 遺物観察表

H1	種別	部種	法 量			成形・調整・文様			指定遺物/保存遺物/丸形	
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考		
1	瓶蓋部	有台杯	12.8	9.3	3.2	ロクロナデ	スリ	ロクロナデ→回転糸切り→高台貼付	完全実態	III区・IV区
2	瓶蓋部	有台杯	(13.0)	9.3	4.1	ロクロナデ		ロクロナデ→回転糸切り→高台貼付	完全実態	
3	瓶蓋部	杯	14.2	7.2	4.0	ロクロナデ		ロクロナデ→底部手持ちヘラケズリ・火だすき痕	完全実態	
4	瓶蓋部	杯	13.1	6.8	3.5	ロクロナデ	スリ 火だすき痕	ロクロナデ→右回転糸切り・火だすき痕	完全実態	
5	瓶蓋部	杯	(13.6)	6.5	4.1	ロクロナデ	火だすき痕	ロクロナデ→右回転糸切り・火だすき痕	完全実態	
6	瓶蓋部	杯	(13.8)	(7.2)	4.3	ロクロナデ	火だすき痕	ロクロナデ→回転糸切り	回転実態	III区
7	土師部	杯	(14.1)	7.3	4.7	ヘラミダケ	黒色処理	ロクロナデ 底部・底部外周	完全実態	
8	土師部	壺	-	-	(5.6)	ヘラナデ		ヘラケズリ	完全実態	
9	土師部	壺	(19.4)	-	(8.0)	ヘラナデ		ヘラケズリ	回転実態	II区
10	土師部	壺	-	4.6	(6.6)	ヘラナデ		ヘラケズリ	完全実態	I区
No.	器 種	素 材	最大長	最大短	最大厚	重量	備考			出土位置
11	金属製品	銅	(3.9)	(1.4)	(0.8)	-	下部欠損			II区
H2	種別	部種	法 量			成形・調整・文様			指定遺物/保存遺物/丸形	
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考		
1	瓶蓋部	杯	-	-	-	ロクロナデ		ロクロナデ	断面実態	I区
2	瓶蓋部	壺	5.9	-	(9.2)	ロクロナデ	自然釉付着	ロクロナデ 自然釉付着	完全実態	P4
3	瓶蓋部	壺	-	(6.6)	(11.3)	ロクロナデ		ロクロナデ 平行タタキ	回転実態	I区
4	瓶蓋部	壺	25.2	-	(8.3)	ロクロナデ		ロクロナデ	回転実態	I区
5	土師部	壺	(22.6)	-	(16.6)	ヘラナデ		ヘラケズリ	回転実態	I区・II区
6	土師部	壺	(23.0)	-	(20.8)	ヘラナデ		ヘラケズリ	回転実態	I・II・IV区・P2
7	土師部	壺	(25.8)	-	(28.5)	ヘラナデ		ヘラケズリ	完全実態	カマド・II区
No.	器 種	素 材	最大長	最大短	最大厚	重量	備考			出土位置
8	石器	砥石	10.4	8.7	4.3	490g	砥石敷き 正面使用痕顯著			II区
H3	種別	部種	法 量			成形・調整・文様			指定遺物/保存遺物/丸形	
			口径(長)	底径(短)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考		
1	瓶蓋部	壺	(13.4)	-	3.0	ロクロナデ		ロクロナデ→文部部回転ヘラケズリ→つみ込み	回転実態	I区
2	瓶蓋部	有台杯	(12.3)	9.3	3.6	ロクロナデ		ロクロナデ→底部回転糸切り	完全実態	I区
3	瓶蓋部	杯	(13.2)	(6.8)	4.1	ロクロナデ		ロクロナデ→底部回転糸切り 火だすき痕	回転実態	I区
4	瓶蓋部	杯	(13.9)	8.7	3.5	ロクロナデ		ロクロナデ→底部回転ヘラ切り 火だすき痕	完全実態	I区
5	瓶蓋部	杯	(14.0)	(6.8)	3.9	ロクロナデ		ロクロナデ→底部回転糸切り 火だすき痕	回転実態	I区
6	瓶蓋部	杯	(14.3)	7.4	3.8	ロクロナデ		ロクロナデ→底部ヘラケズリ 火だすき痕	完全実態	
7	瓶蓋部	横瓶	-	-	-	ヘラナデ		ヘラナデ	回転実態	I区
8	瓶蓋部	壺	-	-	-	当て具瓶		タタキ 自然釉付着	断面実態	I区
9	土師部	武蔵壺	21.0	-	(16.7)	胴部ヘラナデ→口縁コナデ		胴部ヘラケズリ→口縁コナデ	完全実態	カマド・横出
10	土師部	武蔵壺	(21.0)	-	(6.0)	口縁コナデ→胴部ヘラナデ		口縁コナデ→胴部ヘラケズリ	回転実態	カマド
11	土師部	武蔵壺	(21.8)	-	(8.6)	胴部ヘラナデ→口縁コナデ		口縁コナデ→胴部ヘラケズリ	回転実態	カマド
12	土師部	壺	-	4.9	(12.9)	ヘラナデ		胴部ヘラケズリ 底部ヘラケズリ	完全実態	I区・II区

第2表 ビット計測表

No.	形態	径	長さ	土質	出土遺物	No.	形態	径	長さ	土質	出土遺物
P1	円形	60	21	セタあり	土師器壺1	P20	円形	42	20	セタあり	土師器壺1
P2	円形	56	27			P21	楕円形	86	27		
P3	円形	60	35		土師器高杯1	P22	円形	68	25		土師器高杯1
P4	円形	44	16			P23	円形	66	23		
P5	方形	52	14	10YR2/1	土師器杯1	P24	楕円形	1.27	36	10YR2/1	土師器杯1
P6	円形	44	14	10YR2/1		P25	円形	71	48	10YR2/1	
P7	円形	64	6	10YR2/1		P26	円形	70	33	10YR2/1	
P8	円形	64	67	10YR2/1		P27	楕円形	1.53	32	10YR2/1	
P9	円形	32	12	10YR2/1		P29	円形	72	44	10YR2/1	
P10	円形	32	23	10YR2/1		P30	円形	68	56	10YR2/1	
P11	方形	36	15	10YR2/1		P31	円形	77	39	10YR2/1	
P12	方形	36	12	10YR2/1		P32	円形	63	39	10YR2/1	
P13	円形	52	35	10YR2/1		P33	円形	55	46	10YR2/1	
P14	円形	36	13	10YR2/1		P34	円形	64	60	10YR2/1	
P15	円形	56	9	10YR2/1	土師器壺1	P35	円形	52	40	10YR2/1	土師器壺1
P16	円形	32	14	10YR2/1		P36	円形	52	27	10YR2/1	
P17	円形	69	23	10YR2/1	土師器壺4	P37	円形	60	36	10YR2/1	土師器壺4
P18	楕円形	66	24	10YR2/1		P38	円形	56	29	10YR2/1	
P19	円形	41	25	10YR2/1		P39	円形	56	34	10YR2/1	

「出土遺物」の数字は小片を数えた数



H1号住居址



H1号住居址カマド



H2号住居址



H2号住居址カマド



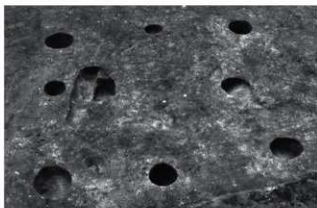
H3号住居址



H3号住居址カマド



F1号掘立柱建物址



F2号掘立柱建物址



報告書抄録

ふりがな	ながとろいせきぐん かみひじりばたいせきよん							
書名	長土呂遺跡群 上聖端遺跡IV							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第252集							
編著者名	富沢 一明							
編集機関	佐久市教育委員会 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込2913 TEL0267-63-5321 FAX0267-63-5322							
発行年月日	平成29年(2017)12月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ながとろいせきぐん かみひじりばた いせきよん 長土呂遺跡群 上聖端遺跡IV	さくしながとろ 佐久市長土呂 158-1、158-3 他	20217	9	36° 17.16	138° 28.35	20170529 ～ 20170607	252	社屋建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長土呂遺跡群 上聖端遺跡IV	集落址	奈良	住居址 3軒 掘立柱建物址2棟	土師器・須恵器 石器・鉄製品				
要 約	台地上に展開する古代の集落の一部分を調査した。周辺の調査事例と同様に奈良・平安時代の竪穴住居が展開することが確認された。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第252集

長土呂遺跡群 上聖端遺跡IV

平成29年(2017) 12月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

社会教育部 文化振興課 文化財事務所

〒385-0051 長野県佐久市中込2913

TEL0267-63-5321

印刷所 キクハラインク有限会社